

ウラーン史 Hu lan deb gter の著作年時

稲 葉 正 就

ま え が き

イタリアのトゥッチ Tucci 教授が、一九五五年に來日せられた際、京都大學で行つた「チベットの歴史文獻」と題する學術講演の中で、次のようにいわれている。

極めて重要な更に他の著述が、やはり未發見であるということは、……殘念なことである。即ちそれは「テプテルマルポ Deb ther dmar po」即ち「赤い歴史」のことであつて、「ウラーンテプテル」とも呼ばれている。……この書物が一三世紀のチベットに關するシナ資料を補足するであろうこと、更にまたその重要性は、第五世ダライラマの自敍傳中にとり入れられているものの幾つかの斷片によつて示されることなどを、若し我々が跡づけ得るならば、それは實に偉大な

發見ともなるであらう。(トゥッチ「西藏の歴史文獻」長尾雅人訳・「東方學」第二二輯所収による)
また教授は、この未發見の偉大な史書を探し求めたことについて、引續いていわれている。

幾度かのチベット旅行中に、私は「テプマル」の一部を入手すべく最善を盡したが、不成功であつた。ラサで、ガンデンの僧院長から「テプマル」だという寫本を一部贈られた時には、私は身震いをした程である。しかし檢べて見ると、それが原本ではなく、同じ書の再製であつて、ソエナムタクパという、デボン寺の有名な僧であり、多くの著述をしている人が、この本を一五三八年に書いたものなることがわかつた。

(前掲のものによる)

結局、教授はそれを入手することができず、その代り

に得たのは新しい「マルボ史」であつた。

この講演は、一九五八年のわたくしの外遊中に、常に脳裡より離れなかつた。そして灼熱下の眞夏のインドに未發見の資料を探し求めて多くの辛酸を嘗めた末、チベットとの國境の峠を望見することができるとシッキムのガントク Gangtok で、圖らずもこの偉大な史書を手にとることができた。當時シッキムの Chief Secretary の要職にあつた T. D. Densapa 氏と僅か一五分ほどの對談しか許されなかつたにもかかわらず、これが古い「マルボ史」であるといつて眼の前に示されたときには、トゥッチ教授でさえ身震いしたのであるから、わたくしが歡喜勇躍の思いに驅られたのは當然のことである。早速撮影を申し出たところ、直ちに快諾を得、之をフィルムに収めて無事持ち歸ることができた。この寫本の寫眞を入手した世界最初のチベット學研究者としての希望に燃えつつ、これの研究に着手した。その研究成果の中、いまは、この史書の著作年時について述べてみたい。

この寫本は、ウメ dbu med (草書)體で書かれた三七葉よりなる比較的短かいものである。第一葉裏に「テプテルマルボ」なるこの書の名が出ているが、表題及び第三六葉表には、「ウラーンテプテル」という書名になつ

ている。hu lan とはモンゴル語の ulan (赤)の音寫であつて、チベット語の dmar po に相當するから、同じ意味である。意味は同じであるが、萬一、古い「マルボ史」と「ウラーン史」とは異本であるかも知れないから、古い「マルボ史」を單に「マルボ史」と呼び、ここにわたくしが入手したものを「ウラーン史」と稱することにして以下考察することにしよう。シッキムの T. D. Densapa 氏の厚意と、氏の自宅へ案内して下さつた本學講師櫻部建氏の勞に對し心より感謝の意を表する。

一

「マルボ史」の著作年時を既に指摘している學者は、丙戌 (1346) と見做しているレーリッヒ G. N. Roerich 氏ぐらいのものではなからうか。氏はこの決定をなした理由を明示していないが、恐らく「テプゴン」の中國の王統を述べる條に、

太宗の女、文成公主が辛丑 (601) に「チベットへ」來た。それより、ツアルパのクンガードルジェの丙戌 (1346) の時まで、七〇〇年が過ぎたことが「ギャイクツァン Rgyah-yig tshan」の中に「記されて」いるという。丙戌の前に五年が「餘分に」過ぎている。「か

ら七〇〇年は「辛巳」(34)に相當すると思われる。
(Ka. 24a, ll. 2, 3; Roerich 英譯 p. 49 参照)

とあるのに據つたものであろう。すなわち、ここにい
う「クンガードルジェの丙戌の時」を、レーリッヒ氏は
「マルポ史」著作の年と見做したのであろう。しかしそ
れは如何なる根據があつてのことであるのか。「テプゴ
ン」のこの文には丙戌の年に「マルポ史」を書いたとは
記していないのである。レーリッヒ氏は、「テプゴン」
の著者シヨンスウペーが「ギャイイクツァン」を持つて
おらず、直接それを見ていたのではなく、それを引用若
しくは依用している「マルポ史」に據つたように考えら
れるという。その證據には、「テプゴン」に

ソンツェン〔ガムボ王〕から〔ラン〕ダルマ〔王〕
まで、「ギャイイクツァン」の中によく書かれて、ラ
マリンチェンタクパ Rin chen grags pa によつてチ
ベット語に翻譯せられている。クンガードルジェ Mi-
hi bdag po Kun dgeh rdo rje によつて文字に書か
れたものにしたがつて記そう。(Ka. 23b, ll. 1, 2; Roe-
rich 英譯 p. 47 参照)

とあることをレーリッヒ氏は注意している。この説は確
かに正しいといわねばならない。そうすると、「テプゴ

ン」の前掲の文成公主云々の記述は「マルポ史」に據つ
たもので、直接「イクツァン」を参照したものでないこ
とになる。さてそこで、「マルポ史」と「ウラーン史」
と同一であるならば、その原文をこの「ウラーン史」
の中に求める筈である。そういう期待をもつて、この
「ウラーン史」を見ると、中國とチベットの王統を述べ
る條に、

太宗の女、文成公主が辛丑の年に〔チベットへ〕來
た。

thalü dzüñ gi sras mo wun giñ koi jo lcags mo glai
si lo la byin / (Densapa 氏所藏寫本 8a, ll. 5, 6)

という同文の記載があつて、「テプゴン」はこれに據つ
たのに相違ない。そしてその次に、しばしばチベットの
史家が行う如く、現在筆をとりつつある年まで七〇〇年
という年數の計算の記述が施されておれば、確實に「マ
ルポ史」と「ウラーン史」と同一であるといえる。そう
いうことを豫期して讀んでゆくと、豈はからんや、そう
云う記述は全く見當らない。それでは「ウラーン史」の
ほかに「マルポ史」が別にあつたのであろうか。ところ
がそうとはいえない注目すべき記述が、却つて、「ウラ
ーン史」の前掲記述の少し前に、

とあるのを見ると、あたかもジャムバラの口述をクンガ・ドルジェが筆記したように承けとれるが、「ウラーン史」の前掲の文にはジャムバラがラサで文字に書いた *yi ger bris pa* とあるから、ジャムバラが書いた史書を後に参照したと理解してよいであらう。そうすれば、「ウラーン史」の著作年時は必ずしもジャムバラの入藏年次(1334)に接近していたと考えなくてもよいことになる。さて、以上要するに、レーリッヒ氏の一三三六年著作説は「テプゴン」の所説により歸納したものと思われるが、「テプゴン」の所説の史料となつた「マルポ史」とこの「ウラーン史」と同一であるとして矛盾が生じないから、もし同一と見做せばこの「ウラーン史」を研究することによつて、氏の著作年次説の根據が薄弱となるのである。したがつて、ただここで結論できることは、「ウラーン史」の著作年時は、ジャムバラの入藏の一三四四年(至正四年)以後であるということである。

二

それでは、「ウラーン史」そのものに著作年時が記されていないのであるか。そこで同史の最後を見ると、

Kri dben 一三三年において。

インダ、シナ、カシミールなどと
ネパールなどの諸國の地方と、

學問成就のラマたちの出現の狀勢と、

人の支配者たる王や宰相たちと

先輩の年次と業績〔に關する〕この傳記は、

この記録の中に明らかに述べられている。

……………(以下略)

Kri dben lo hi gu rtsa gsum la // //

/ rgya gar rgya nag kha che la sogs dan /

/ bal po la sogs sa yi phyogs rnam dan /

/ mkhas grub bla ma rnam kyi byon tshul dan /

/ mi yi dbaṅ po rgyal blon chen po rnam /

/ sku tshelji tshad dan mdzad pa nam thar bdi /

/ dkar chag hdir ni gsad bar bryod pa lags /

/ …………… (Densapa 氏所藏寫本 37a, 1.3 以下)

とある。この偈は、チベットの書物の最後にしばしば見られるような形式のもので、敬語が用いられているから多分後代の附加であらう。したがつて、それには何ら史的價值を見出せない。問題はその直ぐ前にある

Kri dben 一三三年において。

という日附である。これは一見して著作年時を示すもののように思われる。そこで、「ウラーン史」の中の元朝の王統 *Hor gyi rgyal rabs* を述べる條に、この *Kri dben* のことを探してみたのであるが、そこには、それを見出すことができない。ところが、順帝の記載に注目すべきものがある。すなわち、

太子トコンテムール *The gan the mur (cor. Toron Temür)* は、癸酉の年 (1333) に王位に即いて、至順 *Ci gun* 一カ年、元統 *Dben thun* 二カ年、至元 *Ci dben* 六カ年、至正 *Ci jin*。

sras che ba the gan the mur gyis chu mo bya bañi lo la rgyal sar bsngs nas / ci gun lo 1 / dben thun lo 2 / ci dben lo drug / ci jin // (Densapa 氏所藏寫本 13b, 7.4)

① 寫本には、*byi* とある。

とあるから、*dben* は「元」に對應する。この對應は、この記述だけにとどまらず、諸資料全般に

大元 (元の國名) *Ta dben*; *Tahi dben*

都元師 (*Ta yuan shuai*) *Du dben ga*

などの諸例が見られる。すなわち、*dben* は元をチベツタナイズした音寫である。ところがもう一つの *kri* につ

いては、それがどういう漢語の音寫であるのかわたくしにはわからない。そこで、*Kri dben* が年號の音寫であるうと假定すると、元を下にもつ年號は至元しかない。元が滅亡して北元に天元という年號があるが明らかに當らない。しかるに至元は、「ウラーン史」の前述の王統中に *Ci dben* と音寫せられているし、且つ至元は六年までしかない。といつて、世祖の至元では年代が早過ぎる。となると、これらの矛盾は、如何にそれを解決すべきであるか。

先ず、*Kri dben* は、*Ci dben* 或は *Cri dben* の書寫傳承中の誤記ではなからうかと考えられる。或は、*Kri* の發音が當時既に *Ci* と口蓋音化していたかもしれないから、*Kri* と音寫したとも考えられる。何れにしても *Kri dben* を至元の音寫と見做すより致し方ないのではなからうか。もしそうであれば、至元二三年とはどうしたことであらうか。直ぐ前に引用した元朝王統を述べる中に、「至元六カ年」と記しているから、著者は至元が六年しかなかったことを知っていた筈である。このように考えてくると益々わからなくなってくる。思うに、元朝のこの頃は各地に叛亂が續出して混亂し壞滅の直前であつたから、ジャムバラが入藏して著作したようなこと

はあつたけれども、刻々と變りつつある元朝内部の現状は、チベット側には充分にわからず、それがために改元を知りつつも至元で算えたのではなからうか。もしこの推定が許されるならば、この至元二三年とは至正一七年でなければならぬことになる。すなわち一三五七年に相當する。これが「ウラীন史」の著作の年ではなからうかと思われる。しかしながら、この決定までの途上に假定的な考えを設けつつ進んで來たのであるから、一三五七年著作とするのは明確な結論とはなり難い。そこになお幾ばくかの疑義が残るであらう。したがつて單に一説とするにとどめるべきである。

三

「ウラীন史」の著作年時を明確に決定することは上述の如くできなかつたから、その中に書かれている内容より著作年時を推定してみよう。

第一に、直前に引用した元朝王統の記載中の順帝の條に、

至順一カ年、元統二カ年、至元六カ年、至正。

とあつて、至正には年號を與えるだけで年數は、それを記していない。そこで元朝の王統に關する記述は突如と

して止められている。そして次に細字で、

トゴンテムール王は王位に三七年間即きたまい、その後……

rgyal po tho gon the nur gyis rgyal sa lo sum
cu so bdun mdzad / de riñ..... (Densapa 氏所藏寫
本 13b, 74 以下)

とあつて、順帝退位後すなわち元朝滅亡後に説き及んでいる。しかしこれは細字で書かれているから明らかに後人の附加と見做してよい。したがつて原本は、至正までで、しかもその年數が記されていないということである。それは何を物語るものであらうか。それはいうまでもなく、この記述をしている時が至正年間であつて、至正が未だ了つていなかったと見てよいであらう。ところが、それに對して疑問が起る。その疑問というのは、先に述べた如く、「ウラীন史」の元朝王統に關する記述は、ジャンバラが一三四四年(至正四年)に入藏して間もなく、ラサで書いた史書に據つたから、そうなつているのであらうという疑問である。しかし、「ウラীন史」が次の洪武以後に書かれたとすれば、至元が洪武に改められたのは單なる改元ではなくクンガードルジェが屬するツアルパに親密な關係のあつた元朝の滅亡(北への敗

走)という大事件であるから、それを記さない筈はない。故にこの疑問は成立しない。したがって、この「ウラーン史」の著作年時は、ジャンバラの入藏の二三四四年から至正の最後の二三六七年の間になされたと考えられる。

第二に、チベット古代の最後のランダルマ *Glan dar ma* 王の後裔が、ネパールの王となる記述において、「ウラーン史」はプリトヴィマツラ *Prithvimalla* 王まで了つてゐる。すなわち、

ヤツエ *Ya rtse* で生れたプリティマル *Pri ti smal* と大臣ベーデンタクパ *Dpal Idan sgrags pa* は、サキヤの法座と、ラサの十一面〔觀音〕の上に黄金の頂蓋を作つた。(Densapa 氏所藏寫本 18b, 7, 5)

という記載を以てネパールに關係ある王統の説明をする。トゥッチ教授は、西ネパールのドゥツラ *Dulla* という所の近くにある貯水槽の上に書かれたシャーカ *Śrī-gāka* 一二七六年 (= 1354 A. D.) の日附のある銘を發見し、その中の *Prithvimalla* と *Yagovarnan* がチベット史料にいう *Pri ti smal* とその大臣 *Dpal Idan sgrags pa* とに當るといふ⁽⁴⁾。更にトゥッチ教授は、ドゥツラとスルケート *Dulla-Surkhet* 道にある村のはずれで發見したシ

ヤーカー一二七九年 (= 1357 A. D.) の日附のある碑文によつて、チベット諸史料に傳えるチベット王の後裔が碑文中のネパールのマツラ *Malla* 王朝の諸王と一致することを立證せられた⁽⁵⁾。すなわちチベット史料の記載は決して出鱈目なものでなく、大略確實な事實を傳えていることを、碑文という同時代資料で以て證明せられたのであつた。そして、これらの碑文などの研究によつて、プリトヴィマツラ王は、1338, 1351, 1354, 1357, 1358, 1376年に在位してゐたことがわかつた⁽⁶⁾。そうすると、この王はほぼクンガードルジェと同時代であつたわけである。この王は、佛教王であつたらしく、サキヤやラサに寄贈をしたというから、ラサの近くのツァルパのクンガードルジェにもその名が知られてゐたと思われる。「ウラーン史」には、この王より以後のことは絶えて記されていないから、同史が至正年間に書かれたという前述の結論は、よし同史がこの王の在位中に書かれたということであつても、そこに何らの矛盾を含むものではないからう。

第三に、カーム派の系統 *Bka'h gdams pa* *hi rgyud pa* の條に、同派の寺院の歴代座主が列擧せられているについて、一體、何年までの座主が記載せられているのかを検討してみよう。「ウラーン史」に記す歴代座主に

は、その在位年数が示されていないから、「テプゴン」の記載に援けを求めねばならない。

先ず、ナルタン Snar than 寺の座主について。

かの有名なナルタン寺は一一五三年にトゥムトンロートェタク Gtum ston Blo gros grags によつて建立せられた。この人を初代座主となし、爾來歴代座主を、「ウラーン史」には第一二代まで、「テプゴン」には第一九代までの名を列擧する。「テプゴン」によると、

〔第一二代〕ケンチェンロブサンタク、Mkhan

chen Blo bzai grags pa が四〇年、これまでに二一三年が過ぎた。その後の乙卯(1375)に〔第一三代〕

ケンチェンクンギェルワ Mkhan chen Kun rgyal ba が任命せられた。(Ca. 19b, l. 6; Roerich 英譯 p. 283 参

照)

とあるから、第一三代の座主就任は一三七五年(明の洪武八年に當る)と思われる。「ウラーン史」は第一二代までしか記さないから、第一二代座主が四〇年間の在位中に書かれたと考えてよい。そうすると、至正年間の著作という前述の結論と何ら矛盾しないことになる。

次に、チャユル Bya yul 寺の座主について。

チャユル寺はチャユルワチェンポ Bya yul ba chen po

(Gshon nu bod) (1075-1138) によつて建立せられ、この人を初代座主とした。それより「ウラーン史」は第一一代までを、また「テプゴン」は第一三代までの出来事を記載している。「テプゴン」によると、

その次に〔第一一代〕ツェンドーワツルティムゴンポ Btsan gro ba Tshul khims ngon po は、……

この人は辛巳(1341)から癸卯(1363)まで座主をなした。(Ca. 28b, l. 7, 29a, l. 1; Roerich 英譯 p. 304 参

照)

とあつて座主在位の期間を明示している。「ウラーン史」には、この座主までで、次の座主の名は掲げられていない。⁽⁸⁾「ウラーン史」が著作された時は、第一一代座主が在位中で第一二代が就任する前であつたかもしれない。もしこの推定が正しいとすれば、第一一代の在位中、すなわち一三六三年(至正二三年に當る)までの間に著作されたということになつて、更に最下年時が少し短縮される。しかしながら、第一二代の名を載せていないからといつて、必ずしも第一二代の就任前とは決定できないであろう。したがつて、この最下年時の推定は確乎たるものではない。とにかく至正年間の著作ということと矛盾しない。

次に、ギャマリンチェンガン Rgya ma rin chen sgan 寺の座主について、「ウラーン史」は第八代までの名を記す (Densapa 氏所藏寫本 25a) が、「テブゴン」は第一八代までを記している (酒井教授所藏本 Ca. 33b, 34a)。この歴代の座主在位年數に關しては、「テブゴン」の原文に誤寫があるので、ここに詳述することを省略するが、とにかく、第八代座主は至正年間に座主であつて逝去したことに間違いなく、「ウラーン史」には至正年間の記載までしかない。故に同史が至正年間の著作ということに對して矛盾していない。

以上、「ウラーン史」に記されている内容からその著作年時を究明してみた。要するに、至正年間の記載があるから、その著作が至正の初頃ということにはならない。しかし明代になつてからの記載がないから至正年間の著作であらうと推定せられる。故に、この「ウラーン史」は、ジャンバラがラサで史書を書いたことを記しているから、確實にいえば、ジャンバラの入藏の一三四四年から至正末の一三六七年の間の著作である。

四

ところが、「ウラーン史」の中に一つの異例的な記述

が見うけられる。すなわち、

ニャツェンポ Gñah khri bisan po よりトリニ
 ェンツェン Tho tho ri shan bisan まて丁度六六〇年、
 トトリニエンツェンよりソンツェンガムポの生誕の前
 に一五〇年、それより、丙戌にチャンチトンパ Byaṭ
 ji ston pa によつて王統記「パサムジョンシン Dpag
 bsam ljon cñ」が作られた前に九三年、それより
 六一年の丙戌にこの王統記が書かれるまでにニャツ
 ェンポ以降一七九四年が過ぎた。このチベット王統
 記は、多くチャンチトンパセラブム Byaṭ ji ston
 pa ḡes rab ḡbum によつて多くの王統記が集められ
 たものを、パクトクパリンチェンドルジェ Dpag tnos
 pa Rin chen rdo rje に尋ねて書いた。(Densapa氏所
 藏寫本 19a, 7. 5—8)

という記載であるが、この中に、丙戌の年にこの王統記が書かれたという。「この王統記」とは、この「ウラーン史」を指すと見做すより致し方あるまい。それでは丙戌の年というのは何年であらうか。この記載の中に、ガムポ王の生誕が年數計算の區切りにあげられている。王の生誕年次は、現在では學者間の一つの未解決の問題であるが、生誕に最も近い出來事についての確實な史料と

して「舊唐書」吐蕃傳上に、

貞觀八年、其贊普、棄宗弄讚、始遣使朝貢。

という記載がある。貞觀八年(634)に初めてガムボ王が唐へ朝貢したことは諸學者の異議のないところである。

この六三四年に手がかりを得て「ウラーン史」の前掲記載の年次計算を行うと、

ニャチツェンポ王

207 B. C.

トトリニエンツェン王

453 A. D.

ガムボ王の生誕

603 A. D.

「パサムジョンシン史」の著作

1526 A. D.

この王統記の著作

1586 A. D.

となる。この計算によると、この王統記というのはこの「ウラーン史」を指すとすれば、その著作年時は一五八六年となつて、「テポゴン」の著作(1478)より百年以上もおくれることになる。そこで、この記載の一つ一つについて詳細に検討を行わねばならない。

まず、ニャチツェンポ王とは、有史以前のチベット王統の最初の王である。この王からガムボ王までの年數計算については、「王統鏡」に説かれているが、それを見ると、

ジェニャチツェンポよりラトトリニエンシエルの前

に二七代五〇〇年が過ぎたというけれども、法に關係のある王はないから、年代記が詳しく著わされていない。ラトトリニエンシエルの時に、正法を初めて得て

「その利益のために王は」一二〇歳なることができた。それより四代、ナムリソンツェンの前に一一一年が経過した、と「カーツィクチェンモ Ka shigs chen mo」に説かれている。これらは略言であるから、詳しく知ろうと思えば、「カーツィクチェンモ」「カーテムカーケヘルマ Bkañ chens ka khol ma」「王統記パサムジョンシン」などを見よ。(Tharchin 氏所藏 本 27b, l. 6—28 a, l. 2; 王沂暖漢譯「西藏王統記」二二頁 參照)

と記されている。「ウラーン史」の先の記述では、ニャチよりトトリまで六六〇年、トトリよりガムボ生誕の前まで一五〇年、合計八一〇年である。ところが「王統鏡」では、ニャチよりトトリの前まで五〇〇年、トトリは二〇歳の長壽であつたが在位八〇年と記し、それよりナムリの前まで一一一年である。「王統鏡」では、ナムリ在位六〇年餘、ガムボ王一三歳のとき父王薨じて即位とあるから、ナムリ在位四八年餘でガムボ王が生誕したことになる。したがつてニャチよりガムボ王生誕まで

合計約七四〇年ほどということになる。これを先の「ウラーン史」の合計と比べると、約七〇年ほど少い。「王統鏡」におけるこの計算は、「カーツイクチェンモ」に據つたと記されている。この史書は未だ発見されていないのでよくわからないが、「王統鏡」の計算が「王統鏡」より古い史料の説であることは確かである。有史以前の王統は、加上的に時代が下れば下るほど上へ上へと積み重ねられ、一層古いものとするによつて王統を權威づけようとしてのパンテオンが構成された。そのことは既に佐藤長氏によつて、その著「古代チベット史研究」上巻(一八〇頁)に指摘し立證せられた。そういう點からいつて、「ウラーン史」の中の前掲の年代計算は古い説とは言ひ難いであろう。

次に、「ウラーン史」の前掲の記載では、ガムボ王の生誕は六〇三年となる。これはまさに珍らしい記述であつて、他の史料には之と同じ記述を見ない。この生誕年時によると、即位は一三歳の時というから六一五年となり、貞觀八年(634)の唐への朝貢は王が三二歳、貞觀一五年(641)の文成公主降嫁は王が三九歳、逝去(649)は王が四七歳の時となり、中國諸史料とは何ら矛盾せず、まことに妥當なものとなる。もし前掲の記載の年數に何

らかの誤りがないものとすれば、ガムボ王生誕年時に關する一説として採りあげて好都合なものである。ところが、同じ「ウラーン史」の中に重大な矛盾を發見する。それはガムボ王についての記述の最初に、

ソンツェンガムボ王は、丁丑の年(olT)にチャムパ
ミンギェル Byams pa mi bgyur [王宮]において生
れたもうた、…… (Densapa氏所藏寫本 Ia, 1. 1)

とあつて、王の生誕を六一七年という。これは「プトン史」の記載と一致するから、プトンの説を繼承したものである。同じ書物の中に矛盾した記載があるということは全く首肯し難い。恐らく「ウラーン史」の前掲の年數計算は、數字に誤りがあるか、或は後人が附加したものといつてよいであろう。

次に、「パサムジョンシン史」の著作年時を丙戌(1526)とする。この史書の名が、前に引用した如く、「王統鏡」の中に出ている。故に、後の「パサムジョンサン史」でないことはいふまでもない。またそれは未だ發見されていないので知る由もない。「王統鏡」の著作年時は、その奥書に戊辰とあり、それに對して學者間に異説があつたが、結局一五〇八年か或はそれ以後の戊辰の年であるという。⁽⁹⁾「王統鏡」は、「パサムジョンシン史」の名

を掲げているから、それより後の著作である。もし「パサムジョンシン史」の著作年時が一五二六年であれば、「王統鏡」は一五六八年の戊辰か或はそれ以後でなければならぬ。この説に對して現在の段階では反駁する資料が見つからないようである。しかし、兩書ともに著作年時が聊かおそすぎるように思われる。今後の研究に俟つものがある。

最後に、前掲の「ウライン史」の年數計算の記述の中に、「この王統記」が更に六一年後の丙戌(1586)に書かれたという。「この王統記」とは、文章の前後より考えて、この「ウライン史」を指すと見做すよりほかに致し方がないであろう。ところが、この「ウライン史」を「テブゴン」と比較してみると、後者が明代をも記すのに反して「ウライン史」には元末までで明代の記述が全く書かれていない。そのことについては既に述べた通りである。したがつて、この「ウライン史」は「テブゴン」の著作年次(1478)より前に存在していなければならぬ。それ故に「この王統記」というのは、この「ウライン史」を指すとは、どうしても首肯し難いことである。

このように一つ一つに當つて前掲の年數計算の記載を

検討すると、この記載は「ウライン史」の他の部分と矛盾した異例的な内容をもつものといわねばならない。それでは、何故にこのような異例的な記載が書かれているのであろうか。それは年數の數字が傳承の間に間違つたのでないかと思われる。というのは、この王統記が書かれたという丙戌の年は、レーリッヒが「マルポ史」の著作年時を一三四六年とする前述の説において、一三四六年がまさに丙戌の年であるのと一致するからである。これは偶然の一致であるかも知らない。もし數字が間違つていないとすると、後人の附加と考えねばならない。

デンサバ氏の寫本では、後人の附加は細字で記されている。ところが、この記載は細字で書かれておらず、あたかも本文の如く見える。その寫本の紙質は新しいものであつたから、恐らく筆寫傳承の間に、後人の附加した細字註が、本文の如く大きい文字で書寫せられてしまつたのではないかと思われる。もしそうであつたならば、なぜ後代の人がこのように「ウライン史」にふさわしくない書き入れを施したのであろうか。或はこの「ウライン史」を後の新しい「マルポ史」と考え違ひをしたのかも知れない。やがて新しい「マルポ史」のフィルムが目下インド留學中の長崎法潤氏から本學へ送られて來るのを

待つて確かめてみたいと思う。とにかく、この記載は異例としてオミットして考えねばならないであろう。

む す び

以上、「ウラーン史」の著作年時について究明して來たが、要するに奥書の Kri-ben 二三年を二三五七年と見做して、それが著作年時であろうと思う。もつともこの解釋が、正しいかどうか疑問があるにしても、少くとも一三四四年より至正年間で、すなわち一三六七年までの著作であることは推定せられうるであろう。しかし、チベットに關する新出資料が續々と發見せられつつある學界の現状から考えて、「ウラーン史」の著作年時に關する決定的な結論を得る日が來るかも知らない。またわたくしは、この「ウラーン史」こそ、まさに學界が待望しつつある古い「マルポ史」そのものであるうと思う。それについても、わたくしは、「マルポ史」を引用しているといわれる「五代ダライの傳記」を未だ入手する機會に恵まれていないので決定的な結論をくだしえない。そのほか、目下登場しつつある新出資料を待つて今後の研究に期待することとする。

註

- (1) G. N. Roerich: "The Blue Annals." I. Calcutta, 1949. Introduction p. VI.
- (2) G. N. Roerich: *ibid.*, Intro. p. VII.
- (3) 野上・稲葉「元の帝師について」(石濱先生古稀記念論文集「東洋學論叢」に所收)四三一頁參照。
- (4) G. Jucci: "Preliminary Report on two Scientific Expeditions in Nepal." Roma, 1956. p. 45. ff.
- (5) G. Tucci: *ibid.*, p. 46. ff.
- (6) L. Petech: "Medieval History of Nepal." Roma, 1958. pp. 113, 114. note.
- (7) Densapa 氏所藏寫本 24b, ll. 4, 5.
- (8) Densapa *ibid.*, 25a. l. 3. 「ウラーン史」の第一二代座主の名は 'Slob dpon Spyran sha ba Tshul khrius ngon となつていて、「テブゴン」と少し異なるが同一人と見てよいであろう。
- (9) 佐藤長「古代チベット史研究」上卷一〇頁。

(昭和三十五年度文部省科學研究費による總合研究成果の一部である)